読者からの声

女性医師の窓

仕事と私

芳珠記念病院皮膚科　松下　幸世

先日卒後臨床研修指導医の講習会に参加しました。私自身臨床研修医に直接指導する機会はないのですが、誰かを指導する際に大切なこととして、直接会話すること、ほう・れん・そうの重要性、良かった行いはきちんと褒めることなど、当たり前だけど忘れがちなこれらのことを再確認し、自身をみつめなおすよい機会になりました。

私が卒業したのは卒後臨床研修義務化以前で、すぐに皮膚科に進み、一年目は大学病院、二年目から二年間富山県の病院で勤務しました。上司の先生は皆、困った患者さんがいたら一緒に診察し、学会発表やサマリーは赤ペン先生のように添削してくださり、患者さんの診断など適切だった場合はよく褒めて下さいました。皮膚科医はどうあるべきか、という医療に対する姿勢もその頃に叩き込まれたように思います。今でも困ったときは先生だったらどう考えるか？と指導医の先生方の顔が思い浮かびます。そんな研修医時代の経験は一生の宝です。

私は産休や家族の仕事の関係で何度か仕事を休んでいます。復帰するたびに新薬の発売や疾患のガイドラインなど、新しく勉強する内容がありました。新しいこと＝知らないこと＝不安にもなりますが、嬉しい驚き・感動の発見でもあり、仕事が好きだから続けているのだと思います。人それぞれの性格であるので、みんながみんな楽しい気持ちで復帰しているとは思いません。女医を取り巻く環境はどんどん変わっています。女医の中でも仕事・研究をしたい人、家庭を持ち子育てしたい人、両方したい人それぞれ価値観が違いますし、同じように女医に対する考え・対応は病院・上司によって違うのは当たり前のことだと思います。すべての条件が整うのは難しいことで、どの時点でよしとするか、よしとしてもらえるか、なのではないでしょうか。そして働くと決めた以上は女医も医師であり、医師とは責任を伴う仕事であることを忘れてはならないと思います。

現在仕事を続けることができているのは、忙しかったけど充実した研修医時代があり、そこですばらしい上司と巡り会えたこと、仕事が好きだということと、そして周囲の理解があるからだと思います。今後も初心を忘れず、まわりの方々への感謝の気持ちを忘れずやっていきたいと思っています。